

共同研究「現代政治研究の新潮流」 2013年度活動報告

代表 渡 部 純

現代政治研究は、近年、方法・対象ともに分化・多様化しており、その全体像を一望するのは、簡単ではなくなっている。今年度、私たちは、できるだけ様々な分野の論者のお話を聞くという方針を立てた。最初から体系化を念頭に置いてテーマを絞ると、多くの見落としが生じるのではないかと恐れたためである。また、それと同時に、各メンバーの最新の研究状況を報告し合い批判し合う機会も、積極的に設けることにした。

報告者には、できる限り専門の枠を超えた学際的・挑発的な報告になるように依頼し、メンバーもまた、既存の枠にとらわれないような議論を行なうことを目指した。この結果、最終的には、研究会は全部で6回、計9名の方による報告を聞く機会を実現できた。

以下、開催順にその内容を簡単に報告する。

4月24日

渡部純（本学）「丸山眞男における法学部の擁護」

丸山眞男は、戦後民主主義の最も代表的な論客として知られている。それ故、その学問論としても、象牙の塔を否定するような立場であるかのように思われてきた。丸山自身が1950年前後には、「市民大学」などでの場で、市民に直接政治を語る試みを展開していたのは事実であり、また、その影響を受けた多くの政治学者たちも、戦後、市民の活動に開かれた政治学の構築を目指してきたのである。しかし、そのような一般的に広く共有されている開放的な学問のイメージに対して、この報告では、丸山にとっては、学問としての政治学の形成の場としては、伝統的な法学部の存在が重要視されていることを指摘した。

法学部という制度と法学という制度的知の重要性が丸山においても認められるという論点からは、今日の日本の法学部における政治学の位置づけをめぐって活発な議論がなされることになった。

7月30日

添谷育志（本学）「Bernard Crick, In Defence of Politics(1962)再読」（法律科学研究所定例研究会と共催。報告要旨は別掲）

10月8日

濱野靖一郎（法政大学）「頼山陽の政治思想」

濱野氏は法政大学法学研究科で博士（法学）の学位を取得したばかりの新進気鋭の研究者である。今回は、東京大学出版会から近刊予定の『頼山陽の政治思想』から、その中心的な部分を報告して頂いた。

大部分のメンバーにとっては、日本政治思想史という分野は政治学の中でも最も縁遠いところのものであったが、150年にわたる日本政治思想史の常識を根本から覆そうという濱野氏の野心的な議論には大きな刺激を受け、近代の政治原理をめぐる活発な質疑応答が展開された（同書は、その後、2014年3月に刊行された）。

1月29日

畠山弘文（本学）「人間にとって「国家」とは何か」（報告要旨は別掲）

毛桂栄（本学）「公務員概念」(報告要旨は別掲)

2月25日

星野 修（山形大学）「今日の政治思想研究」

日本では、戦前からマックス・ウェーバー研究には膨大な蓄積があるが、純然たる政治学的な観点からウェーバーが論じられるようになったのは、意外にも、この30年ほどのことである。そのような政治学的マックス・ウェーバー研究の第一世代である星野氏からは、最近の研究成果も踏まえて、今日の政治思想研究の状況と課題について報告して頂いた。

松本邦彦（山形大学）「地方から見た国際政治」

日本社会の国際化は、大都市圏のみならず、地方においても、さまざまな問題を生じさせている。山形県全域をフィールドとして調査した経験を持つ松本氏には、地方政治と地方政治研究の現状について、国際化・グローバル化が持つインパクトを踏まえて報告して頂いた。

2月26日

大内 孝（東北大学）「近代アメリカにおける法と政治」

アメリカ法制史研究の第一人者である大内氏には、あえて、法制という観点からのアメリカ政治論をお願いした。メンバーにとっては、政治学の世界で描かれてきたアメリカ像とはまた異なる像が提示され、刺激的な報告であり、活発な意見交換がなされた。

片山文雄（東北工業大学）「アメリカ政治思想研究の可能性」

ベンジャミン・フランクリンを素材に学位論文を執筆された片山氏には、それ以後の研究成果も踏まえて、独立前後のアメリカ政治の特徴について報告を頂くとともに、西洋近代政治思想史

の中で見たフランクリンの位置づけなどについてお話を伺った。フランクリンは、ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で重要な例として言及しているところでもあるため、話題は、前日の星野氏による報告に引き続いて近年のウェーバー研究動向にまで及び、新たな角度からウェーバーの理解を深めることができた。